

Title	トマス・ホジスキンの「労働擁護論」：その自然法思想と経済学について
Sub Title	Thomas Hodgskin's thought of natural law and economics in his "Labour defended"
Author	白井, 厚 野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.9 (1958. 9) ,p.777(31)- 794(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19580901-0031
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580901-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小松茂夫「保守の価値意識」

——一九五八・七・一〇——

- (2) Cole; *ibid.*, p. 523.
- (3) A. L. Morton; *British Labour Movement*, p. 114.
- (4) Cole; *ibid.*, p. 524.
- (5) Cole; *ibid.*, p. 532.
- (6) Morton; *People's History of England*, p. 417.
- (7) G. D. H. Cole; *Common People*, 1951, p. 391.
- (8) Morton; *British Labour Movement*, p. 120.
- (9) これについては、拙稿「一八三二年の選挙法改正の歴史的意義——チャーチスト運動史序説」を参照(三田学会雑誌第五十巻第八号)。
- (10) 岩波講座「現代思想」「反動の思想」所収。

《追記》一八四八年のチャーチスト国民請願から一八八〇年代の新組合運動の勃興までの時期における労働組合運動と政治運動との関係は、非常に複雑で、解明したい点が少なくない。筆者はこの試論において、労働組合が選挙法改正においてどのような役割を果たしたか、この点について究明しようとしたが、その目的の半分も達することができなかった。不十分な点については後の機会に補正したいと考えている。

トマス・ホジスキンの「労働擁護論」

——その自然法思想と経済学について——

白井厚
野地洋行

- 一、はしがき
- 二、自然法思想の復活
- 三、ロックとスミス(所有権と自然秩序)
- 四、ゴドウィン、リカードウその他
- 五、資本の物神性と歴史性
- 六、労働運動におけるホジスキンの

一、はしがき

いわゆるリカードウ派社会主義者達の中で、大西洋の兩岸にわたって、ホジスキンの著作が広く読まれた人はない。⁽¹⁾その主著“Labour Defended against the Claims of Capital, Or the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen.” Lond.,

トマス・ホジスキンの「労働擁護論」

1825. は直ちに、W・トムソン、S・リード、T・クーパー、C・ナイト、H・P・ブルーム、J・ミル⁽²⁾等の論議を呼び起し、マルクスは「剰余価値学説史」において「経済学者に対するリカードウ説を基礎とせる反対」の一つとしてこれを取り上げて、「労働擁護論」は「少なからぬ注目を集め、今日もなお(J. Lator; *Money and Morals*, Lond., 1852. 参照)イギリス経済学の文献中重要なものとして数えられている」と述べている。⁽³⁾

それでは、何故にこの書が当時において大きな反響を招き、P・レイヴンストンその他の類書が「あと形もなく消え去った」のに、今日に至るまでも興味を持たれるのか? 先ず第一に、一八二〇年代のイギリスの興味ある事情と、この書の特別に戦闘的な性格が考えられよう。一八二四年に団結禁止法が廃止されるや、労働組合は公然と活動を始め、それに恐怖した資本家達は、あらゆる手段をも

ってこれに対抗しようとした。「労働擁護論」の冒頭に書かれているように、「前議会開会中に通過した労働者団結の法律についての議論は、どれもこれも資本擁護の緊要なことを大いに力説している」のである。彼等の論旨は、「資本は保護されねばならぬ。その運用が拘束され、労働者の団体によって左右されるならば、資本はこの国を去ってより有利な国へ行くだろう」(ランズダウン侯の言葉「労働擁護論」より)というものであった。そしてこの対立において、資本家達に最も有力な理論の武器を与えたのが、J・ミルやマカロック等リカードウ学派の経済学である。それは、マルサスの人口論によって支えられた賃金基金説を奉じ、資本の恩恵とその生産性を主張した。ホジスキンはこれに反対して、資本の不生産化を証明し、労働者貧困の原因を資本家の不当な分前に求め、労働者の運動に理論的な基礎を与えようとしたのである。元来彼は労働者ではなかったが、一八二三年に「Mechanics' Magazine」を創刊し、Mechanics' Institute を設立して後のチャーチスト運動の指導者 W. Lovett や H. Hetherington に影響を与え、労働運動に對して多くの貢献をし、明らかにブルジョア急進主義から一步出るものがあつた。まことにヘアの言うごとく、これは「イギリス労働階級の、組織的な統制ある闘争が始めて行われた最も記憶すべき一八二五年における、イギリス労働運動の宣言書であつた。」⁽⁶⁾と言えよう。

第二には、勿論第一の点と関連するが、この書が社会思想史、経

済学史において占める特殊な地位、つまり、彼がロック・ミルスの自然法思想をリカードウ経済学解体の時期に復活し、それをもって資本を攻撃し、当時の労働階級の立場から、資本の物神性に対抗したことによつてである。

- (1) Introduction by H. S. Foxwell, in *The Right to the Whole Produce of Labour*, tran. by M. E. Tanner, 1899, p. lvi.
- (2) A. Bain; James Mill, a biography, 1882, pp. 363-7.
- (3) K. Marx; *Theorien über den Mehrwert*, Bd. I, S. 313. 改造社版 M・J 全集十一巻三一七頁。ただし訳文はかならずしも邦訳によらぬ。以下全ての引用においても同様である。
- (4) F. Hodgskin; *Labour Defended against the Claims of Capital, Or the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the Present Combinations amongst Journeymen*, (1st ed., 1825), 1922, ed. by G. D. H. Cole, p. 19. 鈴木訳一五頁。以下 *Labour Defended* と略記する。
- (5) M. Beer; *A History of British Socialism*, 1923, vol. I, p. 266. 加田訳三一頁。
- (6) だがその同じ理由によつて、彼はその後の歴史において不当に無視されてきた。大塚金之助「解放思想史の人々」昭和二四年、一六〇〜三頁を見よ。

二、自然法思想の復活

「自然法は哲学と共に古い」といわれ、また幾度も批判されながらも、現在われわれにも大きな影響を持っている。いわば人類は、自然法思想と共にその歴史を歩んできたとも言えよう。それでは自然法思想とは何か？ それは、永久普遍に妥当する法規範を「自然」として経験を超えたところに想定し、社会の制度や実定法はそれに準拠せねばならぬと考へる思想である。それは、一般に社会における諸勢力が、分裂、敵対し、理想と現実がかけ離れ、社会体制が危機の段階にある時に強く意識され、要請される。そこで、自然法思想の歴史を顧みる場合、何よりも必要なことは、それが、歴史のそれぞれに重要な役割を担う人々が「自然」と考へた事柄の内容の歴史だということであろう。従つて、その担い手の階級が異なれば、勿論伝統的な用語の權威に頼ることはあつても、当然にその思想内容は異なる。ダントレーブによれば、「名称を除いては、中世の自然法概念と近代のそれとの間に共通なものほとんどない。」⁽³⁾ほどであつて、ホジスキンの場合にも、ロックとミルの自然法を祖述しながらも、それをまさにリカードウ以後の段階を特色づけるような方法で資本攻撃の武器に用いている点を、特に重要視すべきである。

イギリスにおける十九世紀の前半は、社会的、政治的には産業ブルジョアジーの勃興の時期であり、思想的には、ベンサム功利主

義が支配した時代であつた。十八世紀のフランス啓蒙思想の特性が、近代自然法を武器とした人類一般の解放であり、封建的束縛からの理性、正義、自然的権利の一般的解放であつたとすれば、ベンサム主義哲学の本質は、かかるフランス啓蒙思想から革命性を抜き去ること、「人類一般の解放」が当然第四階級の解放をも包含しうるその論理的必然性を抜きとることであつた。ベンサムが「自然の権利」や「永遠の正義」という近代自然法の基本観念を嘲笑するのは、ブルジョアジーが既に経済社会を支配して、超越的な理想によつてその行動を擁護する必要がなく、かつそのような理想に對して彼等の秩序が矛盾をきたしたことを意味する。フランスにあつては支配的だつた革命が、この時代のイギリスでは改革 (Reform) として現われた。

ホジスキンの思想の独自性は、それまでの労働者のための思想が、多かれ少なかれベンサム哲学を前提とし、その限界内で可能な限り労働者のためのものへと接近したのに対して——ブレイス、オウエン、トムソンらはその代表的なものである——、断乎として功利主義を拒否し、ロック以来の近代自然法に歸つてゐることである。オウエンやトムソンは、たとえ労働者の貧困を正当化する経済学や人口論には反対であつたとしても、その社会哲学の前提として功利主義を採つてゐたために、同じくベンサム主義を奉ずるリカードウ学派の経済学者達と現実の経済機構について理論上の衝突をきたすよりは、このような幸福原理が実現されるような理想の社会を画くこ

とにより大きな努力を払った。だがホジスキンは、資本主義的経済秩序の自己確認であるところの功利主義そのものを否定し、生産者の所有権を基礎とする自然法思想を、労働者のために再び取り上げたために、現実の経済組織とより根本的に、よりきびしく、より直接的に対立せざるを得なかった。オウエンがいかなる意味でも経済学者ではなく、トムソンもまた現実の分配法則に対しては道徳的な批判を下すに止まったために、資本は生産的なりとして資本の請求権を絶対化しつつある経済学者達に対して真正面から理論的攻撃を加えるべき役割は、かくて主にホジスキんに委ねられることとなったのである。

- (1) H. Rommen; Die ewige Wiederkehr des Naturrechts, 1936, S. 11, 阿南訳一頁。
- (2) D. G. Ritchie; Natural Rights, a criticism of some political and ethical conceptions, 1895, Chap. i-iv.
- (3) A. P. D'Entreves; Natural Law, 1951, 久保訳五頁。
- (4) 自然法思想を労働者にまで拡大したものにフイブカントの proletarisches Naturrecht の概念 (Verkant; Der geistig-sittliche Gehalt des neueren Naturrechts, 1927, S. 25.) があるがこれはあくまで理念的である。
- (5) 白井厚「W・トムソンの分配論」三田学会雑誌五一巻二号参照。トムソンは資本の使用も新しい価値を生み出すと考え、その

または交易の労働に過ぎない。労働は物を作るのではなく受取るのであり、それに対応して労働の投下は所有権の基礎ではなく、所有権は国家成立以後の問題であった。それに反してロックは、私有は人間が設定したものでなく、財産に対する権利は自然権であることを立証しようとして、「各人の有する財産は、彼以外の何人もこの請求権を有せざる彼自身の人格中にある。各人の身体の労働と手の仕事とは当然に彼自身のものであると十分の理由をもって言い得る。自然が創造しかつ彼に提供した対象から彼が製造するものは、彼自身の労働と合体し、それによって彼の有するものと結合したのであって、かくして彼はそれを自分の所有とする。」と述べて、所有権の基礎を、主権による割当から現実の生産における投下労働へと移行させている。これはまさに、「国民経済学上最も大きな、事実根本的な意義を持つ」ものであって、これが近代的な社会秩序の自立化を指向する故に、古典派経済学の中心概念となった労働価値説はここにその起源を求められる。だがここで、「ロックは資本家の労働と賃労働とを区別してはいない……実際最初彼は賃金労働者ではなく、自分で耕す土地や、その職業の材料や道具を持っている人の労働について考えていた」ということが注意されねばならない。ロックは、基本的には独立自営的な社会観から出発しているのであって、マルクスの言うように、「一個人が自らその労働をもって利用し得られる以上の生産手段の分量を所有している」ということは、ロックによれば一つの政治的発明である。それは所有又は私有財産の

トマス・ホジスキンの「労働擁護論」

尺度を二つ挙げている。即ち労働者の尺度によれば、それは資本の減価償却額十資本家の監督賃金であり、資本家の尺度によれば、機械その他資本の使用によって生産された価値の増加分 additional value である。そして労働者の尺度を採用した方が、社会の幸福にとって望ましいといふ (W. Thompson; An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth, most conducive to Human Happiness, pp. 167-171)。資本の不生産性を証明して、資本家のいかなる要求をも拒否したホジスキンの断乎たる態度と比較すると興味深い。

三、ロックとスミス (所有権と自然秩序)

ホジスキンは、早くからロックの弟子であることを自認⁽¹⁾、後年の "The Natural and Artificial Right of Property Considered, a series of letters, addressed without permission, to H. Brougham, esq. M. P., F. R. S., etc., by the author of Labour Defended against the Claims of Capital." 1832. においても強くロックの哲学を表明している。従ってホジスキンの社会哲学の二つの源をロックに求めることが出来る⁽²⁾。この場合、特に問題となるのは、ロックの自然法における所有権の意味である。ホッブスにあっては、自然権は、生命維持のためあらゆるものを自由に利用する権利であった。その場合にも労働の重要性が強調されているが、労働は、神が与えるものを受取るか、

権利の自然的基礎と相矛盾するもの⁽³⁾なのである。その故に、労働の全生産物は労働を加えた者に帰属すべきだという全労働取益権の思想はロックから生れたのであるし、また一方における労働価値説の発展がスミス・リカードとブルジョア経済学の中に客観化され、同時にその革命的性格をうすくしていった時に、現実の労働の不等価交換にいきどおる直接生産者の立場に立つ人々、特に小生産者の立場の人々が、所有権の基礎をロックにまで遡って求めたことはけだし当然といふべきであろう。スミスは労働を投じたものがその全生産物を持つべきだという証明のためにはなく、労働力の販売が自由であるべきだということを示すために、労働はその自身に属するという理論を使った。「各人が彼自身の労働について持つ所有権は、他の全ての所有権の基礎であると共に、最も神聖で不可侵である」という「国富論」の有名な章句は、まさに労働力の商品化を強調するためのものである。富は労働の生産物であり、労働は価値の原因であるという学説は、その財を所有すべき人は誰かということを我々に教えはしない。労働の全生産物が労働者に属するのは、「資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社会」においてのみであって、かかる状態は市民社会では消滅してしまった。しかしながら、自然権が自然法として編成されるや、ホジスキンは全面的にスミスの影響下にある。

ロックの時代においては、自然法学者は人間を法の下に平等な、完全な権利能力を持つ主体として、その幸福に営利行為を自然なも

のとして是認し、このような個人が造り出す社会を分析したが、ここでは未だ十分なかたちでは社会の経済構造の法則性を認識するには至らなかった。だがスミスにおいては、市民社会の個人の活動そのものが自然法の名の下に是認されて、もはやそれに対立する権利を主張する必要がないので、自然権の基礎は不明確であっても、経済的な自由放任の中に利己心の追求と公益の一致が自然に無視されるという予定調和的な社会理想をもって人為的な拘束に対抗し、このような自然法秩序の光の下に、客観的な社会の体制認識に到達したのである。いわば、ロックにあっては未だ個別的であった自然権という合理性の主張が、スミスにおいては、現実の商業社会から経験的に把握された自然法という調和的な秩序全体の理想型をもって、非合理的な体制に向けられた。スミスにとって、自由こそ自然であり、人為はその逆であった。「国家を最低度の野蛮より最高度の富裕に導くためには、平和と低い租税とある程度の正義以外には何ら必要なものはない。他の一切のものは、ことがらの自然的行路によってもたらされる。この自然的行路を妨げ、これを強いて他の通路に往かしめ、またはある特定の点において社会の進歩を阻止しようとする一切の政治は、不自然なものであって、おのれ自身を支持せんがために必ず抑圧的圧制的とならざるを得ない。」⁽¹⁰⁾ スミスは、この自然的秩序に対する権力の侵害がいかに有害であり社会成員の幸福を傷つけるものであるかを立証しようとした。そしてこのような価値法則の支配する自然こそ宇宙の摂理であり調和的だという考えは、ホ

ジスキンの靈感を与えたのである。
自然と人為を対立させることは、ホジスキンのアルファでありオメガであった。彼は絶えずスミスを引合いに出し、その「自然的秩序」を現実の社会と対照させて実定法や慣習を批判した⁽¹¹⁾。だがホジスキンの場合、このようにして有罪の宣告を受ける現実は、不必要な国家活動や前近代的な拘束だけではない。スミスには思いもよらないことであるが、資本家が利潤を取得するという事実自体が、労働者貧困の原因として、非調和的なものとして、従って不自然なものとして激しく非難されるのである。勿論スミスは、生産力の展開と資本の蓄積がスムーズに進行する場としての自然的秩序を賞揚していたのであって、スミスの中には市民社会の財産制度を糾弾する論理は存在しない。ロックに至ってはまさにこの制度の露払いであった。従ってそこには、市民社会の害悪と不調和を確認し、財産の蓄積を激しく攻撃し得る別の論理が必要である。

- (1) E. Halévy; Thomas Hodgskin, edited in translation with an introduction by A. J. Taylor, 1956, p. 31.
- (2) ホジスキンのいわく、「ロックによれば、精神は物質の反映である。それ故に、精神の産物である法律は、明らかに自然権の存在を記すことができる。それがその権利を創造するとは考ええない。自然は全ての人に働く力を与え、その全ての働らきにその報酬を与える。このようにして自然は、法律にはよらない財産の自

然権を創造する。……もし神または自然が——これは同じものだが——財産権をこの基礎の上に築いたとすれば、同時にそれを守るに必要な手段を人間に与えた。一方では、未熟で弱い人よりも多くの鳥獣や魚を捕えより多くの富を創ることを得させるその強さや熟練は、その獲物を守ることを可能ならしめるであろう。他方、自然は人間の大多数を、強さ、熟練、能力において平等に創り、全ての人にほとんど同様な知識獲得能力を与えた。そこで、他人が生産したものを力で取ることは、それを造るよりも難しいであろう。……政治経済学の新しい発見はロック理論を強化した。」
E. Halévy; *ibid.*, pp. 115-7.

- (3) 水田洋「近代人の形成」一九五四年、一一七頁。
- (4) 大田可夫「イギリス社会哲学の成立」昭和二十三年、三二二頁。
- (5) J. Locke; *The Second Treatises of Civil Government*, ed. by Gough, p. 15. 松浦訳二五四—五頁。
- (6) これは自然状態について論じているのであって、彼のいわゆる *Political or civil society* についてはな。後者の状態においては、貨幣の導入によって蓄積の限界は無限に拡大し、人々は「労働と勤勉が始めに生んだ所有権を、契約と同意によって決定した」(*Civil Government*, p. 24)。⁽¹²⁾ ノットナーは「このようにして最後にはロックは、財産は人間が協定の上で創った物であるという古い理論に帰って行った」(R. Schlatter; *Private Property*, 1951, p. 158. 明山、浜田訳一六五頁)。「ロック

自身は必ずしもいわゆるロック派ではなかった」(*ibid.*, p. 152. 訳一五九頁)という。だがそこでも、ロックは実際の所有状態をそのまま是認したのではないこと、マルクスの言うように「個人的な労働の標準は残っている」(K. Marx, *ibid.*, Bd. I, S. 17. 訳八巻四〇頁)こと、自然状態とは未開社会を指すのではなく、市民社会の一つの抽象であることが注意されるべきであろう。
(7) W. Roscher; *Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre im sechzehnten und siebzehnten Jahrhundert*, 1851. 杉本訳二〇〇頁。
(8) G. W. Gough; *John Locke's Political Philosophy*, 1950, p. 82.
- (9) K. Marx; *ibid.*, S. 14. 訳八巻三七頁。
- (10) マルクス「国富論草稿その他」大道訳一八九頁参照。
- (11) ここから彼の説を論理的に理解しようとする考えが生じる。 Cf. Einleitung von Georg Adler, in *Verteidigung der Arbeit gegen die Ansprüche des Kapitals*, von T. Hodgskin, übersetzt von F. Kaffel, C. H. Driver; Thomas Hodgskin, and the Individualists, in *The Social & Political Ideas of Some Representative Thinkers of the Age of Reaction & Reconstruction, 1815-65*, edited by F. J. C. Hearnshaw, 1949, p. 198. だが、彼の自然法は資本批判の手段となり、「経済学者が『科学的』を展開した一面」を受けつ

いた点に注目すべきである。

四、ゴドウィン、リカードウその他

ゴドウィンの思想体系には、個人主義、無政府主義と、私有財産、資本主義批判の二つの面があるが、ホジスキンはこの双方をそれぞれ特有の方法で受けついで。アレヴィは、ホジスキンが本有原理の敵対者、功利主義者、個人主義者として出発したとして、*“On Naval Discipline”* 1813. にすでにゴドウィンの影響を見出し、またペンサムの場合曖昧な *natural identity of interests* と *artificial identity of interests* の対立において、後者に一貫したゴドウィンの系列の上にホジスキンを位置づけている。そのような意味で、また特にホジスキンが個々の法律ではなく実定法一般を攻撃する時、彼はゴドウィンの無政府主義者であったと言えよう。だが彼は、経済的には商品生産を排したゴドウィンと違ってレセ・フェールに徹していた。海軍軍律への批判を期として文筆の道に入ってから、ドイツ政府の独占事業、職業・組合規定の弊害を指摘し、国勢調査、国民教育制度、政府の保護政策にも反対した彼は、また社会主義は単に高慢と専制主義の新型であるとしてこれを排し、自由競争を賞揚して結局は自由貿易主義へと進んだ。トムソンは自由と平等を調和させることに苦慮して協同主義を採用したが、ホジスキンは安んじてこれを「市場の値切り合い」にゆだねた。ホジスキンの無政府主義は、代議制批判など政治的にはゴドウィンであるが、

経済的にはスミスで、この点は、後述する彼の労働運動への態度と微妙に関連する。

だが、彼は現実の社会批判を多くゴドウィンから学んだ。ゴドウィンの思想は、政治権力と財産制度の強いつながりに注目し、また市民社会を蓄積財産の制度としてその弊害を指摘したこと、重要な意義を持つものである。「政治的正義」によって、大土地所有に向けられていた批判は私有財産全体に拡げられ、また蓄積財産から資本に焦点がしぼられた時、爆発すべきエネルギーが貯えられた。蓄積財産に対するゴドウィンの道徳的糾弾は、ホジスキンにより経済的に翻訳されて資本の攻撃に向けられ、自然と人為との対比は、リカードウの残した利潤の問題をめぐって一段と激しさを加えるのである。このようにして、資本主義を批判する道徳的雰囲気を作り上げたのがゴドウィンであるとすれば、それを経済学において準備したのはリカードウであった。

いわゆるリカードウ派社会主義者達の中でも、ホジスキンはリカードウを直接に研究した人はいない。彼はリカードウの理論をそのまま承認はしなかったが、その中に含まれる資本主義社会の鋭い分析と、反資本主義的な結論を引き出し得る可能性を、本能的に読みとっていた。リカードウは、スミスと異なって資本の支配する社会では自然調和が得られないことを教え、また、投下労働に基礎を置く価値法則を、土地所有によっても、資本の蓄積によっても破棄されないものと述べた。そして最も重要なことは、彼の投下労働価

値説の必然的な結論の一つとして、資本は不生産的であるという命題を引き出し得ることである。「資本は労働者を購着せしめる以外の何ものでもない。労働こそ全てである。これが実際、リカードウの見地から、リカードウ自身の前提の上に立って、プロレタリアの利益を代表する全ての著書の、最後の言葉である。」したがって、ホジスキンにとっては、かかる労働のみの生産性を立証し、価値法則に矛盾するかのごとき現象を排除し、本来調和する筈の自然に到達することが問題であった。

ホジスキンに影響を与えた人としては、他にも例えば急進主義を鼓吹した J・ペンサム、J・ミル、F・ブレース、社会学の H・スペンサー、資本物神性批判の先駆たる P・レイヴンストーン等々がいる。だが、彼の思想と理論体系の中に、その大きな源泉としてロックの自然権、スミスの自然法、ゴドウィンの蓄積財産批判、そしてリカードウにおいて完成した古典派経済学の成果の一面を、リカードウ経済学解体期の直接生産者の立場に立つ強い実践性の裏付けと共に見出し得るであろう。彼等はいずれも直接生産者を代表する面を持ち、富(または価値)の基礎を労働に置いていた。ゴドウィンは最も経済学と縁遠いが、「世界には人間の労働以外にはいかなる富もない。富と誤って呼ばれているものは、社会の制度によってある人々に与えられた、他人を自分の利益のために強制し得る力に過ぎない。」と明瞭に述べている。このような、富の基礎は労働だという信念(実際には富と価値を区別すべきだが)が、ホジスキンの思想の中

枢を貫き、さまざまのニュアンスを持った人々の思想が、その点で統一、総合されて、彼独自の重要な結論を生み出すに至るのである。

- (1) E. Halevy: *ibid.*, pp. 31, 168-9.
- (2) *Ibid.*, p. 54. フォクスウェルが、ゴドウィンの影響をトムソンの上に大きく評価して、ホジスキンの上に認めない (H. S. Foxwell; *ibid.*) ことは不可解である。
- (3) E. Lowenthal: *The Ricardian Socialists*, 1911, p. 68. スタークは、ロックとスミスの平等主義から出発したホジスキンは、結局は資本主義階級社会と妥協してしまったという。 W. Stark: *Ideal Foundations of Economic Thought*, 1948, p. 103. それはやや極端な表現だが、彼が平等に対してより強く自由を主張したことは事実である。
- (4) 白井厚「十八世紀英仏社会思想の発展とウィリアム・ゴドウィン」三田学会雑誌五十巻八号参照。
- (5) 彼のリカードウ批判は、その説が自然的調和観に反していること、資本の立場に立って反地主闘争に重点を置いていることに向けられる。
- (6) 「彼の理論は、資本家の搾取は労働者の貧困の原因だという私の見解を確証してくれる。」*Labour Defended*, p. 80-1. 訳六四頁。
- (7) K. Marx: *ibid.*, Bd. III, S. 309. 訳十一卷三三三頁。

五、資本の物神性と歴史性

ホジスキンは、J・ミル、マカロック等の資本学説に反対して、自己の理論を展開する。例えばミルは「資本を、労働と共働する生産手段であり、諸商品を生産するために労働と結合する積極的行為者として語り、かくて彼は満足して、讀者に対して資本はそれが現実に受けとっている生産物の多大の分前を全てうけ取る資格がある」と証明しようとして「⁽¹⁾が、彼によれば、「労働者がこのよ

うな理論を論破することができず、またほとんどあらゆるものを資本に与える行為に反抗する決心をしない限り、その境遇の改善は永遠にできない」のである。そこで彼は経済学者達の

資本Ⅱ生産手段（節約され蓄積された過去の労働）
 という俗流の見地に対して、

資本Ⅱ共存・熟練労働（現在の労働）

という考えを対抗させた。すなわち、

流通資本の効能について——(1)使用のために貯えられた過去の労働の生産物があるというものは何ら知られていない。(2)通常商品の貯えのおかげだとされている効能は共存する労働から生ずる。(3)資本家が他の労働者に衣食を給し、従って雇うことができるのは、ある人々の労働に対する支配力のためであって、商品の貯えを持っているためではない。

かの『驚くべき』へボ学者マカロックにおいて極端に達したリカードウ学説の究極たる粗硬なる物神的偶像崇拜、即ち人間と動物との差別を失くしたのみならず、生きたものと、物品との区別さえも無視した学説とを比べるがよい。

彼はスミスⅡリカードウの伝統に従って生産的基礎の上に立ち、スミスの「貨幣または貨物をもって物を買う時、それは労働をもって買うのであり、それはあたかもわれわれが物を得るのに自分の肉体の労役によるものと同じことである。……かくて、労働はあらゆるものに対して扱われる本源的な購買貨幣であった。」という言葉を自分の価値規定の典拠とした。そして更に進んで、スミスⅡリカードウが労働力の商品化を前提としながら労働と労働力を混同したのに対し、ホジスキンは労働そのものに力点を置いてその商品化を否定した。「この点では、資本家的生産における商品関係を、これから抽象して人間対自然の一般的関係に解消せしめようとする見地はスミスよりも遙かに露骨にホジスキンによって示されている。」⁽⁷⁾われわれは、ここにスミスをも越えて、直接ロッキ的な要素の再現を見出すのである。

そして彼は、このような単純な労働過程をもって自然的と考え、それを直接に資本主義生産と対置した。彼は、スミスが富の自然的分配と人為的な財産権から出る財産を区別したのに、その後継者達がその区別を忘れ、人為的な財産権の結果が自然法則でもあるかの如く考えていることを攻撃し、資本の不自然性を暴露せんとした。「全

固定資本の効能について——それを有利に使用するために必要なものは、(1)機械を発明する知識と才能、(2)その発明を実行する手の手練と器用、(3)それを使用する熟練と労働、である。

結局「従来資本に帰属されている一切の効能なるものは、共存し、かつ熟練せる労働からくる」し、「資本家、即ち圧制的な仲買人を眼界から取り去ってしまえば——一切の物を生産する人々にはほとんど何物をも所有させないような社会的規制を取り除いてしまえば、明白に資本、即ち労働を雇う力と共存労働とは同一物であり、又生産的資本と熟練労働もまた同一物であり、従って資本と労働人口とは精確に同意語である。」

経済学者達は、利潤の取得を弁護し、資本主義における労働の自己疎外を自然なものと考え、資本が労働を支配する社会を是認するために、労働の物的条件たる過去の労働Ⅱ資本を重要視し、過去の労働の蓄積が現在の労働を支配する力を生むのだと説明したが、ホジスキンにとっては、資本の生産性なるものは実は労働の生産性に他ならず、蓄積とは、社会的労働力の熟練と知識の蓄積なのである。そこで、経済学者の客観的要素・資本重視に反撥して、彼はその意義を過少に評価し、逆に労働の役割を強調して、一切を労働過程における主観的要素・労働の中に解消する。「全物的世界、即ち『財貨の世界』は、ここでは社会的生産に従事しつつある人間の単なる動機となりまた消え去って行く後から後から彼らが絶えずくり返して造り出していく所の活動と化してしまふ。さてこの『理想主義』と

ての機械は労働の生産物である。」「それが以前の労働の結果に過ぎない限り、そして労働者によってそれぞれの使用に向けられない限り、それはその製作費を償わない。……それらの大部分は保存せられている事によって価値を減ずる。……固定資本はその効用を以前の労働からではなく、現在の労働より引き出すのである。そしてその所有者に利潤を与えるのは、それが貯え置かれたるが故ではなくして、それが労働の支配権を獲得する手段であるからなのである。」⁽⁸⁾かくしてマルクスは「遂にここにおいて資本の性質が正当に理解されている」と讃辞を呈している。彼において特徴的なことは、投下労働に基づく交換が自然とされ、資本が不自然なものと考えられていたので、資本と労働は最初から不均衡交換として、資本はその条件として把握され、しかも共存労働の成果に過ぎないものをあたかもその独自の働らきであるかのように見せることは、搾取階級の利益をかくす主観的な詐欺と見たことである。「資本とは、教会や、国家、あるいは他人を丸裸にする人達がその人々を剝奪する手をかくすために発明したその他の一般の名称のように、一種の神秘的な言葉だと実際信じたくなる。資本とは人々がその前にひざまずくことを要請されている偶像の一種である。平伏している間に、狡猾な坊主は祭壇の後から手をつき出し……宗教のためだとして信者に請求した供物を失敬してわがものとする。」⁽⁹⁾このようにして彼は、資本の価値生産性を主張する経済学者の物神崇拜的観念に対して、過去の労働の過大評価への反撥と、自然法思想をもって対抗するのである。

しかしながら、このように資本主義生産を単純に労働過程一般に解消し、単にそれを自然法への背反と見ることは、折角資本の物神性に対抗しながらも、その歴史的性格の認識への道を妨げた。資本は一定の歴史的生産関係として理解すべきであったが、「ホジスキン自身もまたその論戦において経済学的愚迷論法から出発している」。「ホジスキンもこの点については何ら与るところはない」。彼は資本主義の諸前提を全てそのまま自然なものとして受け容れ、労働による財産は「不動点」であった。しかも労働過程と価値(剰余価値)増殖過程における資本の機能を区別せず、固定・流動資本という経済学者達の概念を無批判に踏襲する。その結果、必然的に価値形態、商品形態、貨幣形態、資本形態等の独自性は見逃され、資本家の意志は資本の運動形態とは無関係なものとなり、折角の物神性への対抗も、それを生ずる物質的な基礎が全く無視されて、単に不自然な権力、主観的な欺瞞、歴史上の偶然にその原因が求められることとなった。彼は資本の生産力を否定する論戦において、「過去の労働自体、又は再生産のためのその生産物の新しい労働の条件としての重要さに反対し否認する如くに見える」。「経済学者の粗硬なる見解に対し、主観の強調、いわば主観における主観的なものを物体に対立させて強調する事が問題であったために、彼はその時々労働生産力の発展段階を指摘しなかった」⁽¹⁷⁾。そこで彼の理論は、(一)一方において資本主義の発展方向に対する洞察を欠き、(二)他方において資本家的生産を基礎とする諸現象を純粹に客観的にその本質

的連関において観察する事が出来ない⁽¹⁸⁾。労働過程に所有の基礎を求めるロッキの自然縮思想と、人為制度を攻撃するスミスの自然法思想は彼をして経済学者の拜物観念に対抗せしめたが、その同じ観念が彼を資本の歴史的認識から遠ざけ、経済学者の愚迷論法の中に閉じ込めるのである。

- (1) Labour Defended, pp. 34-5. 訳二八頁。
- (2) Ibid., p. 19. 訳一五頁。
- (3) Ibid., p. 52. 訳四二頁。
- (4) Ibid., pp. 63-4. 訳五一頁。
- (5) Ibid., p. 108. 訳八五—六頁。
- (6) K. Marx; Theorien, Bd. II, S. 318. 訳三二二頁。
- (7) 玉野井芳郎「リカードからマルクスへ」八〇—一頁。
- (8) Labour Defended; pp. 54-5. 訳四四頁。
- (9) Marx, ibid., S. 356. 訳三五四頁。
- (10) 玉野井芳郎「前掲書」八五頁参照。
- (11) Labour Defended, p. 60. 訳四八—九頁。
- (12) 鈴木鴻一郎「トマス・ホジスキン」『経済学全集』四卷二八九頁参照。
- (13) K. Marx; ibid., S. 316. 訳三一九頁。
- (14) Ibid., S. 327. 訳三二八頁。
- (15) D. Rosenber; История Политической Экономии,

- (16) K. Marx; ibid., S. 328. 訳三三〇頁。
- (17) Ibid., S. 352-3. 訳三五二頁。
- (18) 森戸・笠「剰余価値学説略史」四一—六頁。
- (19) 玉野井氏は、ホジスキンがリカードをふくむ「経済学者」の理論から一步を踏み出し得た理由として、その労働者の立場を強調し、「労働者ははじめから資本家より高い立場にある。というのは資本家はこの疎外の過程(労働者の労働の自己疎外の過程)のなかに根を下し、そのなかに自己の絶対的満足をみだして、そのに反し、労働者はこの過程の犠牲としてはじめからそれに対して対抗的關係にあり、これをば奴隷化の過程としてうけとっているからである」というマルクスの「直接的生産過程の諸結果」の章句を引用している。「リカードからマルクスへ」一二九頁)が、勿論そのような面はあるにしても、ホジスキンを単に労働者階級の立場から理解するのは問題があるのではなからうか。というものは、ホジスキンが対象としている労働者はかなり複雑で、直接生産者という面で統一されるものであり、彼のイデオロギーは、プロレタリア的であるよりは、すでに述べたように、ロッキ、スミス等の思想をそのまま再生したものであり、それがプロレタリア的な批判を経ることなく利用されているからである。彼がブルジョアの愚昧の限界内にとどまって資本の歴史性を認識しなかつたこと、社会主義にすら到達せず、労働運動から脱落したこと等

1934-6, 広島訳(四五三頁)。

六、労働運動におけるホジスキン

さて、このように彼の理論体系の中には、さまざまな思想と学説が、強い実践性の裏付けと共に見出されるが、かかる帰結をもつ彼の論理はいかなる立場において展開されているであろうか。

全労働収益権、自由競争による商品生産等の主張、また「親方は彼等の職人と同様に労働者である……」⁽¹⁹⁾というような叙述及び、彼の「労働擁護論」そのものが「journeyman」の団結を擁護するべく書かれたこと、彼が、mechanics, labourer, worker 等の言葉を混用していることによつて、彼が小商品生産者ないしは職人層のイデオロギーを多分に反映していることは疑いない。財産の自然権を復活するものは誰かという問に対するホジスキンの答えは、ペアによれば跛行的で矛盾に満ちたものであり、「労働擁護論」においては、その使命を全く労働者階級に托しているが、「自然権と人為権」においては、その使命を完うするものは中産階級であろうと考えているといわれる⁽²⁰⁾。だが実はこのような矛盾は、彼が当時のいかなる急進主義者よりもリカードウ経済学の含意を理解し、資本主義における労働者の宿命的な対立を直視して、資本に対抗するものとしての労働者の団結を説いたというその態度から生れたものに他ならない。それはまさに「リカードウの価値論と剰余価値論を、資本制生産に抗するプロレタリアートのために転用」したものであった。そして

もそこから理解されるべきであろう。

トマス・ホジスキンの「労働擁護論」

彼がそれをなし得たのは、小生産者の或いは職人的立場が当時資本に對立する直接生産者の闘いにおいて重要な政治的・理論的役割を担っていたからである。彼における矛盾は、論理的矛盾というよりは、このようにして労働者に味方するという態度から生れたものであり、そしてこの場合、当時の労働運動自体、特にその指導者層が、非常に複雑な性格を持っていたことの反映として理解することが重要であろう。従って、彼の立場は論理の上だけでなく、当時の労働運動全体の流れの中で考察されねばならない。

ホジスキンの労働運動への影響が結社禁止法廃止運動におけるベンスラム急進主義との協力から始まる⁽²⁾ということは特徴的な事実である。

ブルジョア急進主義はいかなる「革命」をものぞまず、ただ「改革」をのみ要求したとはいえず、それさえ労働大衆の支持なくしては獲得することはできなかった。従って一八二四年のフランス・プレスらの指導による結社禁止法の撤廃運動は、基本的にはブルジョア支配体制確立の一環として理解されるべきではあるが、ともかく結果においてそれはベンスラム急進主義が労働階級の為になした最大の、そして最後の貢献であったといえよう。

それはベンスラム哲学のもちうる進歩性の極限であって、この点においてのみ功利主義とホジスキンの二つの解放の論理の共存を考へることができるのである⁽³⁾。

だが反トリー支配という大義の下に共存しえた二つの解放の論

理の根本的相違は一八二四年結社禁止法が廃止されるや否や忽ち誰の目にも明らかとなる。プレースの期待とは逆に今迄抑圧されてきた組合結成とストライキが軋を切った様に全国に拡がると、労働者の団結の力は解放するには余りに恐ろしい力であることはすぐに判った。一八二五年、資本を擁護する為に再び結社禁止法を強化しようとする政治的・理論的要求に對してホジスキンのその労働擁護論を發表するや、彼がトリー体制の抑圧のみではなく資本の抑圧を、抑圧一般を攻撃している⁽⁴⁾ということは明らかとなり、ブルジョア急進主義は、ホジスキンの攻撃の矢が自分自身に、即ち資本自体にむけられて⁽⁵⁾いるのを見て驚愕する。ホジスキンの哲学的急進主義グループとの交友が断たれ、プレースとの友情が薄れたのがこの時期であつたという事は決して偶然ではないと思われる。

では、ホジスキンのこの資本攻撃の論理は労働運動史上にどのような意味をもっているのであろうか。

それ迄労働大衆をその悲惨から救おうとする理論的努力は主にベンスラム哲学とブルジョア経済学の前提の上になされてきた。マルサス人口論とリカードウ賃銀論を真理として容認するこのブルジョア思想の限界の中で労働者の幸福を願うとすれば、そこには只労働者の教育と道徳的向上による人口制限しか残されていないのである。

「陰鬱な科学」の中からはフランス・プレースの悲観的な解放策しか生れてこない。

従って労働者を解放しようとする理論的努力の歴史は、同時にそ

れがブルジョアの諸前提から解放されてゆく過程の歴史である。

オウエンは新しい巨大な生産力が労働者の幸福に對してもっている無限の可能性をうち開いたことよって労働運動を「陰鬱な科学」と「悲観論」から解放し、労働者に大きな希望を与えた。そしてその意味において偉大な役割を果しているが、それは現実の社会体制と對決の中から生れたのではなく、いわば現実社会の外に、全く新しい、理想的な組織を夢み、実験し、構想することから生れたのであつた。

ここにホジスキンの、ベンスラム急進主義の様に反腐敗政治の一般的小スローガンの下に階級的利害を解消させることなく、又オウエンの様に現実の外に理想社会を構想することによつてではなく、現実の生産社会に君臨する資本自体に反對する論理を展開した、ということが、労働運動にとつて特別の重要性をもつてくる⁽⁶⁾ことが理解できよう。即ち彼はブルジョア急進主義のスローガンの下に埋没していた労働者の特殊の利害を掘り起こし、資本の盜奪こそ労働者の悲惨の原因であると主張することによつて、労働運動をブルジョア急進主義から分化させるべき重要な一歩を踏み出したのである。

「ホジスキンの現存体制の攻撃の武器を提供したとすれば、新しい制度の理想を準備したのはオウエンである」。

だが実は、ベンスラム急進主義のこの様な労働者の方向への発展は、小生産者の路線の上に行われたのであつた。その様な発展を担った人々は、高級熟練職人、即ち政治的伝統において古く、経済

的狀態において恵まれたいわゆるロンドン・アーチザンの有識層だつたのである。

ナポレオン戦争の終結以来、工場労働者、手織工、農民等の広汎な革新的勢力は、むしろコベット、ハントらの懐古的ロマン主義に率いられて、不況や「税金、国債、通貨問題等、戦後を特徴づける一般的、普遍的困難の中にその階級的利害を見失ひ、反トリー、反腐敗政治という一般性の中にブルジョア急進主義と共に闘っていた。従つてこの様な広汎な大衆的勢力は、一八三二年の「裏切られた」改革以降はその独自の階級性に目覚め、新救貧法反對運動を契機としてチャーチズム運動の中に革命的な力として登場するが、それ迄は「労働者の解放」を「産業資本の解放」から区別しようという理論的努力は、むしろ上にのべた様に、ブルジョア急進主義の労働者の発展の中から、小ブルジョアたるロンドン・アーチザンによつてなされてきたのである。全国労働階級同盟の主導的メンバーたるラヴェット、ヘザリントン、ワトソン、クリーヴらはこの様な方向をプレスから発展させたが、そうすることによつて同時に彼らは全国の労働大衆へのかかる知識と理論の伝達者、仲介者となつたのである。チャーチズムの初期、殊に一八三九年の運動迄はロンドン⁽⁷⁾は全イングランド労働運動の中心であり指導者であつた。チャーチスト運動がロンドン労働者協会において発火し、チャーチスト請願書がラヴェットによつて起草され、最初は精神力派が暴力派に優越していた⁽⁸⁾ということはこのことを表わしている。

彼らの思想は議会改革の時代を通じて北部大工業地帯の労働大衆の間に急速に浸透した。「ランカシャーにおける労働階級指導者は彼らの思想をロンドンから受け取った。そしてブレイスはロンドンにおいて革命的思想家の小グループが形成されるのを数年に亘りみてきた。彼らはコベットやハントが信じた社会的不正の漠然とした非難よりも遙かに厳密で確固とした経済的信念を抱いていた。彼はこの運動がロバート・オウエンと、トマス・ホジスキンの教えに創まっているものとして述べている⁽¹¹⁾。かくて我々は、人民憲章を起草し、初期のチャーチズムをリードし、そして結局は北部大工業地帯の革命的勢力によってのりこえられるロンドン・アーチザンの思想が、ペンサムの政治的急進主義と、オウエンの社会主義とホジスキンの労働全取権説の三つの交錯から成っていることをみる⁽¹²⁾。

さてここで我々はホジスキンの還って、彼が労働運動に与えた影響の意味を限定しよう。彼の思想はロンドン小生産者によって受け入れられ、それを通じて北部大工業地帯へと拡がった。だが北部の大工業労働者は労働全取権説をうけ容れると共に、それによって力強く肯定された団結と闘争の権利をばロンドンの職人達よりもよりよく理解したであろうと思われる。そしてこの点にこそホジスキンの労働運動に対して果たした役割の意義があるのである。ホジスキンの卓越性は彼の論理が小生産者の意識から出発しながらも、小生産者を超えた帰結をもっていた所にある、ということができよう。

彼が播いた種はこの様に彼自身の限界をのりこえて成長して行っ

って干渉することを国家に求めようとする彼らの訴えの故に彼は革命的社会主義的急進主義を嫌う様になり、他の人々と共にコブデンの一派や、自由貿易の運動にひきよせられて行った⁽¹³⁾。

彼の時代においては、資本に対する労働階級の政治的、理論的闘争はロンドン職人階層の指導の下に出発したのであり、近代工場労働者はまだ本能的な経済闘争のみその抵抗を限定していたが為に、リカードウの理論を逆用して労働者を擁護しようとするホジスキンの積極的態度には、当然に小生産者の限界があった。だがその中で、彼の思想とその影響は一義的に規定し得ない広い内容を持っていたというべきであろう。彼は剰余価値を確認し資本の物神性に対抗した点でリカードウの理論を凌駕し、資本主義における労資の宿命的な対立を明らかにして労働者の団結を促進した。それはまさに組織されつつあった近代的労働運動に理論の光を与えるものであった。しかし他方において、彼はゴドウィンの無政府主義、スミスの自由主義に徹して、社会主義をも嫌悪した。当時の社会主義は、まだ労働運動と結び付かず、小ブルジョア的な要求と批判の段階にあったのだから、この点ではホジスキンのプロレタリアートの距離はかなり大きいことになる。『君は個人的自由競争を固守して悪い仲間に入ってしまった。何となれば、自由競争の弁護者はことごとく資本家側で、労働者の主張に対して反対側であるから』(Labor Rewarded, 1827) という W・トムソンの批判は、よくその一面を突いていると思われる。

トマス・ホジスキンの「労働擁護論」

だが、彼の思想自体については我々は過大評価をすることはできない。ラヴェットでさえも決して単なるホジスキンの主義者としては留らなかつた。彼らロンドンの労働運動指導者達は、彼らの目標が、労資の協同をとくオウエン主義のみによっても、又経済的内容をもたない政治的急進主義のみによっても、更に団結と闘争のみを強調するホジスキンの無政府主義のみによっても獲得することができないことを闘争の中から学んでいた。かくてホジスキンの、ブレイスやオウエンがのりこえられたと同じ意味においてのりこえられていたのである。

事実、ホジスキンの思想はチャーチズム時代を通じて労働運動を導く重要な思想的指針の一つとなつたが、ホジキン自身は一八三二年にはすでに労働者運動の先頭にはいなくなつた。それは彼における資本物神の解明の仕方自体の非科学性からくると思われる。即ち資本家の生産過程をロックと共に労働過程に還元し、リカードウ以後の時代にスミスの自然的調和の世界を信じたこと、更にゴドウィンにならって政治的無政府を貫いたこと、これらが資本に対する労働者の団結と闘争という輝かしい遺産を残しながらも彼自身はそれ以降労働者の戦列から脱落し、「一八三二年以降新聞雑誌の中に無名の筆者として埋もれてしまった」⁽¹⁴⁾ことの原因である。「これらの仕事(新聞雑誌への寄稿)に熱中したにも拘らず、彼は又普通選挙権をかちとる為、チャーチスト運動に名のうれた講演者として参加した。だが疑いもなくチャーチストの暴力と、社会問題に対して立法を以

そしてこのような広い内容は、結局は彼の実践的な立場と基本的な思想から由来する。彼はそれによって従来の理論を一步進めめたが、同時にまた、自然法の支配する社会の調和的な発展を未来に信じていた。彼が労働者の団結を説きながらも、組合の中における労働者の啓蒙を重要視し、正義に全労働者利益権の実行に最大の希望を托したこと、労働者階級の歴史的意義を理解せず、その実際の運動の方向に反撥を感じたことは、まさに彼の経済学が資本の歴史性を認識せず、労働の歴史的な性格を見失つたことに対応する。従って彼の卓越性は、恰も彼が経済学的愚昧論から出発しながらも資本の物神性に対抗し、マルクスに至る剰余価値論の完成に重要な貢献をした様に、彼の論理が小生産者の意識から出発しながら、その帰結において小生産者をこえ、新しい大工業労働者の資本に対する闘争の為の武器となつた、ということなのである。

(1) 隅谷三喜男氏はこの様なベアの指摘はホジキンに対する認識不足に基くものであり、ホジスキンの労働階級と呼んで自然権の担い手としたのは、主として商業資本に従属した職人達——親方も含めて——であつたと述べている。『リカードウ派社会主義序説』(「古典学派の生成と展開」所収)二六四頁。だが、ホジスキンのいう中産階級は、「束縛と欠乏から全く解放され」、「ヨーロッパの至るところで急速にその数を増しつつあり」、「素晴らしい機械の発明」——生産力の発展と結び付いているので、必ずしも

古い熟練職人と同一視することは出来ないのではなからうか。

(2) ベアはホジスキンの最も活躍した時代を一八二〇年から三〇年であるとしている。M. Beer; *ibid.*, Vol. 1, p. 260.

(3) ベンタム主義者はその哲学的論理の抽象性においてこの運動を推進した。ブレースは十時間法案に対してさえ反対だったのである。このことはハモンド夫妻をして「富者の社会的勢力に對抗しての闘争において真に労働者を援けうる党派はかくてそれ自身の抽象性のとりこであった」と嘆かした。J. L. and B. Hammond; *The Town Labourer*, 1760-1832, 1949, p. 38.

(4) 「最初彼がフランシス・ブレースの助言と後援をうけていた時以来、ベンタムの友人達のグループとの彼の関係は密接で変りないものであった。そして実際ベンタム主義者が自由主義の大義を擁護する点ではどこでも、ホジスキンの急進主義は彼らの急進主義と全く符合していたのである」。E. Halévy; *ibid.*, p. 130.

(5) 彼らはホジスキンの労働階級に与えた「悪しき影響が、ついで屢々語つづる。E. Halévy; *ibid.*, p. 128-9. G. Wallas; *The Life of Francis Place*, revised ed., 1918, p. 274.

(9) E. Halévy; *ibid.*, p. 87.

(7) 「経済学者達は細心にその所説に多くの制限を付したけれども、マルサスとリカードの学説は労働階級には絶望を、中産階級には自己満足をはぐくんだ」A. F. Young and E. T. Ashton;

British Social Work in the nineteenth Century, 1956, p. 20.

(8) ウォラスはブレースの悲観的性格をラヴェットの楽観主義と対比して画いている。G. Wallas; *ibid.*, p. 362-3.

(9) M. Hovell; *The Chartist Movement*, reprinted, 1950, p. 50.

(10) モートンはチャーチスト運動の唯物史観的な階級分析を試み次の様にしている。「この様な分析は屢々「精神力派」チャーチストと「暴力派」チャーチストとして描かれる伝統的な、しかし誤りやすい区別よりもその中に発展した力や弱点や闘争の理由等について、より明確な観念を与えるであろう」。A. L. Morton and G. Tate; *The British Labour Movement*, 1956, p. 80.

(11) G. Wallas; *ibid.*, p. 266.

(12) 上田貞次郎は「ラヴェットが起草し結局は流産した一八三七年二月の請願書の中に、ベンタムの一般的幸福の思想と、オウエンの生産階級の思想と、十八世紀伝来の天賦人權の思想が錯綜しつづると述べている。上田貞次郎「階級闘争としてのチャーチスト」経済学全集第三十九巻所収。

(13) E. Halévy; *ibid.*, p. 130.

(14) *Ibid.*, p. 130.

グッドウインの非線型景気循環理論

——その微分・定差混合方程式モデルの新図式解法——

森 敬

- 一、序論—非線型景気理論の革新的意義
- 二、グッドウイン・モデルの構造
- 三、グッドウイン自身の解法
- 四、新しい図式解法
- 五、結 語

一、序論—非線型景気理論の革新的意義

景気理論の中心課題は、ほぼ一〇カ年の周期をもつといわれる景気の主循環 (Major Cycles) あるいは別名ジュグラの循環 (Juglar Cycles) が何故そのような交替のリズムをもって反復持続されるかを適切な仮定に基づくモデルの構築によって説明することである。

経済学者が現実を観察し確認した主循環は、シュピートホフによれば、一八二二年から一九一三年までのドイツ経済において延べ一〇回生起しており、それらがみな七年から一一年の周期をもっている。

グッドウインの非線型景気循環理論

たこと、またハンセンによれば、一七九五年から一九三七年までのアメリカ経済において延べ一七回生じており、それらが約八年の周期をもっていたことが知られている。このような経済史的事実からは次のような重要な規則性が抽出される。即ち、これらの現象は一定の周期(平均約一〇年)をもった循環的変動であり、しかもその循環は容易に消滅せず反復持続する性質をもつことである。理論家の関心が、このような規則性を具えた循環を生む経済的メカニズムの探究に向ったことは事の当然であった。

そこで、問題のメカニズムを探ってきた理論家の努力の跡を通過すると、現在、循環の純粹理論の観点から、完全ではないにしろほぼ満足の行くと思われる立論は、系譜的に大別して次の二つに分たれるようである。即ち、その一つは不規則衝撃の理論の流れに沿うものであり、他の一つは非線型理論の流れに沿うものである。前者は経済体系をもとと安定的な減衰系と考え、そのような体系に対して外部から不規則な衝撃が十分な頻度で加えられるとき、その体